

歴史探訪 ブラさぶみ ～たたら跡を探そう～

たつたん

龍谷たたら跡

町指定文化財(史跡) S50年9月5日

令和8年 8月3日(月) 9時～12時

【日原地域炉跡】

- | | |
|--------------|---------------|
| ▶龍谷（左鐙・熊谷） | ▶どろぶち（左鐙・一ノ谷） |
| ▶高嶺（左鐙・奥谷） | ▶上ヶ原（左鐙） |
| ▶横道（左鐙・下横道） | ▶成日照（左鐙・畳） |
| ▶福谷（左鐙・福谷） | ▶かじや谷（須川・下左鐙） |
| ▶猪退谷（左鐙・下横道） | ▶出会（相撲ヶ原） |
| ▶中内谷（左鐙・下横道） | ▶赤石（相撲ヶ原・赤石） |
| ▶新畑（左鐙・新畑） | ▶桜ヶ原（左鐙・島） |

たたらというのは、砂鉄を鉄に製造する工場のことです。沢山の木炭を必要とするため左燈、須川といった豊富な木材があるところに、たたらが多く作られました。砂鉄は、三隅町から舟で運ばれました。

この龍谷たたらは、比較的後期のもので文化14年(1817)に開業されました。このたたらでは、砂鉄をヅクと呼ばれるものに製錬し、そのヅクを今度は新畑にあるたたら(鍛冶場)で鋼にしています。これら2つのたたらでは、約400人が住んでいたようです。

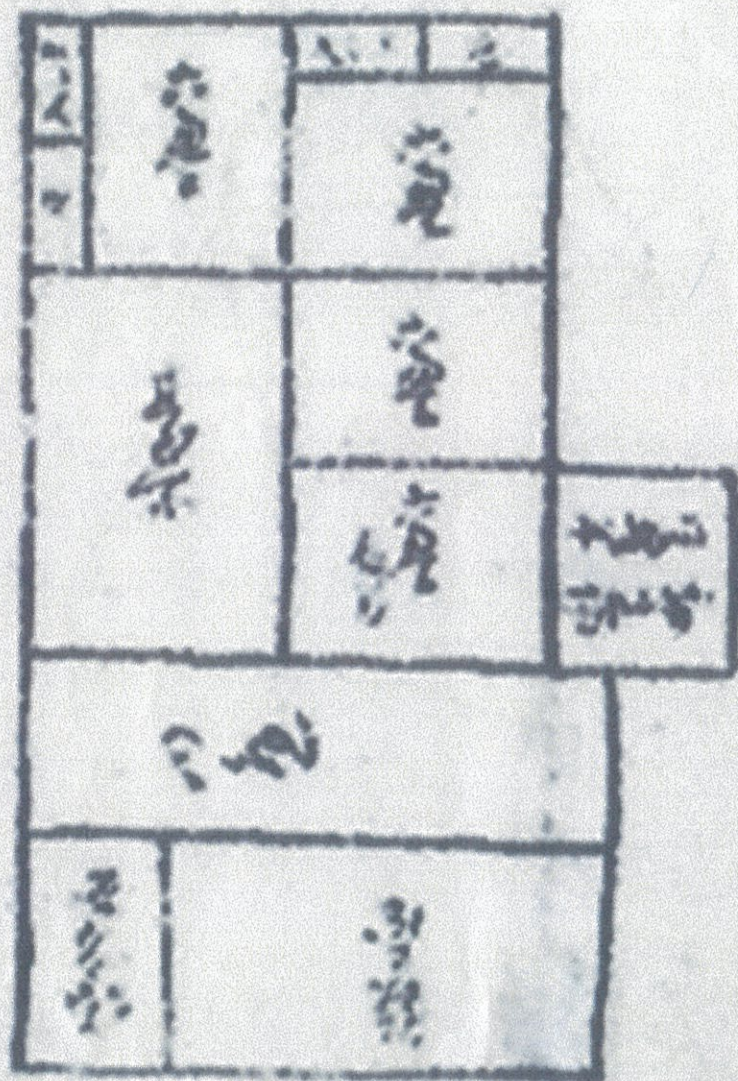
現在、たたら跡には行くことができないので、確かなことはわかりませんが、当時の墓や観音様などが数多く残っているようです。



墓のたたらするに散在する山中

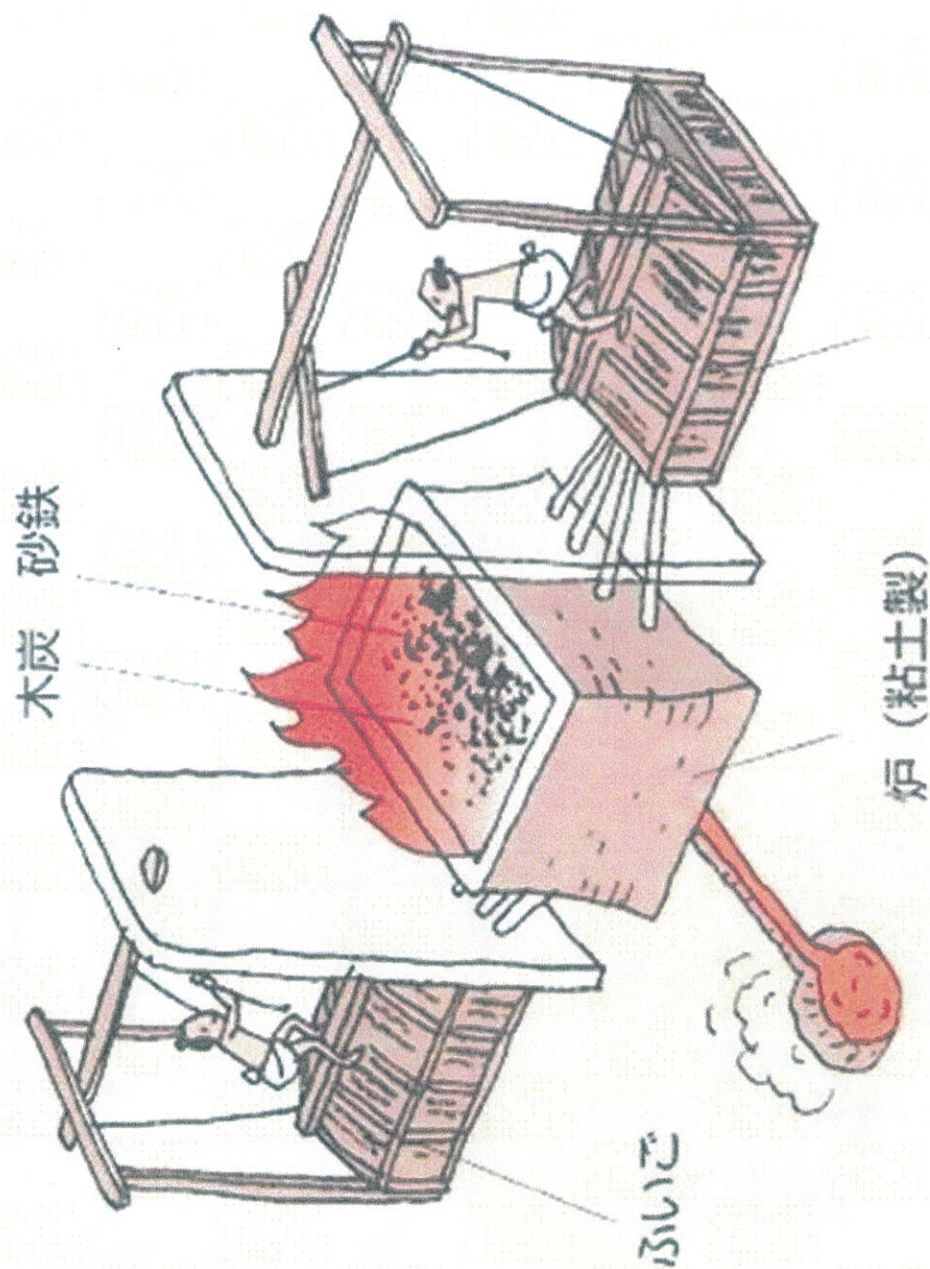
流鉄山記

流鉄山記
 流鉄山記
 流鉄山記
 流鉄山記
 流鉄山記



竜谷鎮・勘場平面図（流鉄山記）

ふいごを用いた、たたら（平安時代以降）の想像図



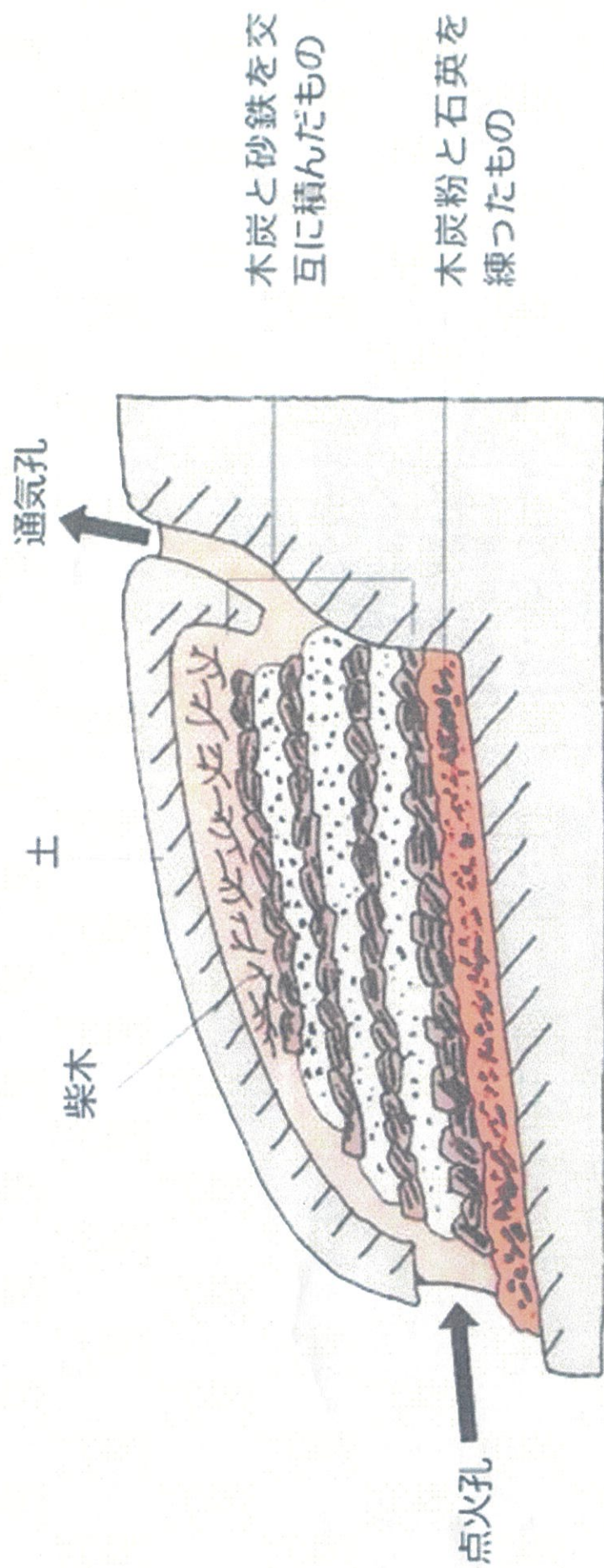
注1 平安時代頃から足踏み式ふいごで送風するようになった。

注2 大量の木炭を燃焼させ、そこに砂鉄を加えていく。

注3 溶けた鉄は底にたまる。

注4 炉は1回の製鉄で侵食されるため、終ると壊す。

たたら炉 (弥生時代の想像図)



注) 木炭による製鉄技術が、日本独自の砂鉄を原料とする製鉄に発展した。たたら炉は比較的低温で鉄をつくるため、溶かして鋳物にする鋳造には適さず、熱しては打つことを繰り返す鍛造で形をつくっていた。

注) この頃は風の強い丘陵などに穴を掘り、自然風を利用して火をおこしていたが、人工的に風を送る方法（ふいご）が開発されて生産が拡大した。

【用語の解説】

【ズク、銑(銑鉄)】

たたら製鉄でつくった銑鉄です。炭素を約2～3.5%ふくんでいて、低い温度でとけます。現代の溶鉱炉につくった銑鉄は不純物がたくさん溶けていますが、ヅクにはほとんど溶けていません。前者はさびやすく、後者はさびにくい性質があります。

【ケラ、鋺(鋼塊)】

たたら製鉄でつくった鋼のかたまりで、炭素を0.3～1.5パーセントふくみます、たたら製鉄ではおもに銑鉄をつくり、操業後半にケラができます。炉の粘土の壁がらなくなる
と炉をこわしてとりだし、外でゆっくり冷やすか、池の水に入れて冷やしました。ケラの中の優良な鋼の部分を「玉鋼」と呼び、炭素を1～1.5%ふくみます。ノロなど不純物が少なく、鉄がよく締まっています。さびにくい性質があり、日本刀の材料に使われています。

【ノロ】

砂鉄が高温で溶けて酸化してできたガラス状のもので、珪砂や石灰、酸化チタンなどをふくみます。たたら炉内の反応で生成するノロは、ケラを覆い、空気による酸化をふせぎます。鍛接では金槌で叩くと激しく飛び散ります。

【聞取り～大庭良美氏著より】

左鐙地区は昔は炉の盛んであったところで、炉のあとが沢山ある。竜谷はおおがかりな炉のあったところで、この〇〇〇の山には炉の墓が三百位あり、天保の年号のものが多い。隣の国有林には千基余りの墓があるが、昔よい墓は改造して売ったという話がある。現在残っている中にも六段の立派な墓があるがこれは親方のものと思われる。〇〇〇〇〇〇の話では炉の家が千戸あったという。炉の者が信仰していた地蔵さまが松の根本にあって、子供の夜泣きをよくなおす。地蔵さまに参詣して地蔵さまの背中をさわると必ずなおるといふので参る人が多い。また川から拾いあげた後利益のある観音さまもあって、これには炉のことが書いてあった。炉の者は土地の人と結婚することはなかった。〇〇の土蔵には炉の免状のようなのがあった。これは〇〇〇〇〇が所有している。

ドロブチの下のミョウガは炉で失敗して牛になったという言い伝えがある。牛というのは鉄がどろどろに溶けて流れ出ると牛のような形になるからで「牛が寝たかやミョウガの宝」という歌があった。

新畑の官場床にも炉があり左鐙の元〇〇〇〇〇の向うにもある。炉のいた所にはどこでも竹と茗荷と山吹が必ず植えてある。茗荷は植えないと生えないもので、島、日浦、芦谷、竜谷、猪木谷、奥谷など炉のあったところは皆そうである。島の山吹は一重で、竹藪のずっと奥に荒れ果てた池がある。明治四十四年九十一歳で死んだ〇〇〇〇〇老人は若い頃高津から高瀬舟で砂鉄を運んだ。砂鉄は一個が八貫匁で、これを四つかるうて舟に乗りよつたと話していた。(左鐙、〇〇〇〇〇氏談)

炉に使う木炭は大きな釜で焼いていた。あんまり大きくて中がもたんだので、中に石垣を積んで持たせるようにしてあった。横道の国有林に二ヶ所、福谷と鍛冶屋谷に窯の跡がある。炭の百俵ぐらい出るような大きなものである。成日照の炉に使った鞆は一丈鞆といって元氣な者が二人でないと吹けない大きなものであった。成日照の炉には「地獄をみたけりや成日照を見い」という歌が残っている。

たたらというのは砂鉄を鉄にするところで、井野村というところへ行くと赤土山の上に溜池について、年が年中、赤土山を打ちおこして洗い流します。すると土は流れて砂鉄が沈む、それを鉄に搾え上げるのです。

仕事場へ行くと六畳あるような大きな炉があつて、それへ半年もどんだん火を焚いて、その灰の上へ炭をおこして鉄を沸かします。炭をおこすのはふいごではなく、ふわというものを両方に据えてぶうぶうおこします。鉄が沸き上つてずく鉄になるとそれを引き上げて一人が廻すと、向こうに三人すれすれに並んでいてぐんぐん金槌を振り廻して叩く、そうして鉄にするのであります。

たたらの人たちは赤土畠を開いて野菜を作っております。あんな赤土の中に何ができるかと思うような所になかなかいい野菜を作っております。(畑 祖父)

成日照のたたらには私が生まれた時たつたんに高瀬舟が11ばいおつたそうで、その頃は私の家も元気のよい頃で、その1111の者に皆酒を呑ませたそうです。父は日原から酒をとって来てそれを商うておりました。たたらへは高瀬舟でヅクを上げて、そこでふいて一二貫目ずつの鉄にするのであります。島にもたたらがありました。成日照のたたらは私が一五、六の頃まで吹いていました。横道の下のごういう所にもありました。この下の橋の下手も昔のたたら床で、ここでやっていたのはいつの頃か知りませんが、ずっと昔のことでありましょう。(豊 〇〇〇〇〇〇 八一 昭一・二・九)

たたらは成日照にもあり、たつたんにも畠にももありました。たたらでは砂鉄をヅクにして、上り鍛冶屋で鉄にします。砂鉄は浜田の先の方から買うて来ました。広い所へ山にいつ立つて(盛りあげて)あるのを大工の使う通りの尺杖ではかつて、縦が何ぼう、横が何ぼう、高さが何ぼうあるから何ぼうあるというて買いました。たたらで砂鉄を沸かすと湯になります。それが樋を流れて出ると鍋に受けて少しさまして固めて池へぶち込んでさます。それを玄能で叩き割ってたたらの子供や女房が下横道のどる淵の上り鍛冶

屋へかゝるう。たたらの男は何人おつても炭焼きでありました。上り鍛冶屋ではヅクを火のように沸かして叩くとばらばら飛びますから槌の平で塩を振つてはこねこねして粘ると叩きます。叩く者が八人、鍛冶屋大工が一人おつて廻すと八人で叩く、炭をつぐ者もおります。金床でも大きなもので、その上へ叩き延べて厚さ一寸、幅二寸、長さ三尺に切つて長割りにします。長割りは地方の鍛冶屋へも売りました。主に広島から大阪の方へ出しました。長割りを買うて鍛冶屋へ売るのを商売にする者もおりました。東というのが一貫三百匁でありましたが値段はどれ位なものでありません。親方がおつてやるのであります。分金がないとやれませんが、炭の沢山いるもので、炭木のある所へ砂鉄を持って来てやつたもので殿さまの山でも願いをすれば木が貰われよりしました。— 左鑑 〇〇〇〇氏 (八八) の話 (昭15・10)

成日照の鉾山はほどづるといふ鉾のつるださうで、掘つて行くと切れてしまつて又できて来るといふ事です。私が生まれぬ前にもやつていたそうですが二十から三十ばかりの頃十年ばかりも掘つていました。鉾は相当出ていましたがつるが切れるのであります。それをやつていたのは何処の者か知りませんがゴダイという人でありました。— 〇〇〇〇〇〇氏の話

この下に昔たたらがあつたものですがこれは上りたたらというたたらで、鉄を仕上げるたたらであります。奥谷の奥にもありました。たたら者やたたらの炭焼きでここに落着いた人もあります。木地屋も奥谷の奥のおつたことがありましたが、木地屋は渡来者といつて嫌つてこれとは縁組をしませんでした。— 福谷 〇〇〇〇氏 (七十四) の話 (昭13・9)

曾庭の内ですが糞谷院にたたらという所があります。ここには昔たたらがあつたものださうで、たたら者の墓といふのが二つあります。— 曾庭 〇〇〇〇氏 (八三) の話 (昭13・2)

